

文化圈説の初期

——オセアニア研究における——

石川 榮 吉

一、はしがき

科学の前進が蓄積的前進である限り、学説史の果す役割は勿論高く評価されねばならない。然しながら既存の学説史のみが常に手掛りとされるならば、そこには又常に第三者の眼鏡を通してしか理解も反省もなされ得ないと言う危険が伴う。一つの学説が、これを築き上げて来た個々の述作の理解を経ずに、これらを概括した第三者の論述を通じて、既に動かし難い一つの学説として、いわばア priori に概念的にしか理解されないとするならば、その結果は当然のことながら地についた学問の成長は見られない。絶えず流行を追う根無し草的境遇に終始する。欧米における研究を常に絶大な刺激として成長して来たわが国の学問の少なからぬ分野では、右のような傾きが今日ですらなお無しとしない。そして遺憾ながら地理学や民

文化圈説の初期（石川）

族学の領域でもそのような状態は多少なり免れなかつたようである。今ここに採り上げる文化圈説——文化史的民族学——にしても、

わが国では若干の研究に具体的に移植をみたのみで、^①開花をまたず今日では最早凋落の傾きにある。海外の新動向に絶えざる関心を抱くことはもとより怠るべきではない。然しながら関心を抱いた結果がこれに引廻される破目に陥つては、悲劇と言わんよりむしろ喜劇であろう。昨日は進化主義、今日は文化圈説、そして明日は機能主義、しかもその間には何の主体的発展の必然性も無い——従つて学問遺産の継承がみられない、と言う式の目まぐるしい変身振りには、これは一体何であろうか。^②

本稿は多少なりかような反省に基づき、文化圈説の初期形成過程を、いまさらながらに再度顧みようとするものであるが、今はなおその賞書の域に止まる。

① 岡正雄・石田英一郎・柳瀬襄爾諸氏の研究が、文化圈説の方法を具体的に採用しているのみである。最近では江上波夫・大林太良「日本の人種・民俗・宗教」（日本地理新大系 第二巻 一九五二年収載）が注目される。

② このような一般的動きの中にあつて、石田英一郎氏が最近試みられた原始社会の解説（平凡社「世界歴史事典」第六巻 一九五二年）は、文化圈説の業績を踏まえつつその中に、未開民族の最新の Synchronic な研究成果を採り入れようとした点で、まさしく注目に値しよう。学説史の浅薄な手引きばかりでは、このような試みはなされ得べくもあるまい。

③ 拙稿「フリッツ・グレーブナーその方法論覚書」（人文地理 第九号 一九五一年）、同「文化圈序説—文化史的民族学の弁明と批判を通じて」（人文地理 第十一号 一九五一年）

二、フロベニウス

文化圈説はアフリカ研究に端を發したと一般に言われる。即ち、人類地理学者フリードリッヒ・ラッツェル（Friedrich Ratzel）のアフリカの弓に関する形態及び系統的的研究（“Die geographische Verbreitung des Bogens und Pfeiles in Africa,” *Berichte der Kön. Sächs. Gr. Wiss. Phil. hist. Kl.* 1877）に纏巻かれ、その門下レオ・フロベニウス（Leo Frobenius）の“Der Westafrikanische Kulturkreis,”

Penn. Mitt. 1897, 1898. において文化複合—文化圏の思考を得、そのにベルンホルト・アンカーマン（Bernhard Ankermann）の“Kulturkreise und Kulturschichten in Africa,” *Zeitschr. f. Ethnol.* 1905. においてフリッツ・グレーブナー（Fritz Graebner）の協力下に、文化圏—文化層の方法の一応の完成が得られたとされる。④ この意味で「アフリカ」は、文化圈説をばぐんだ実験の場として、メモリアルな位置を研究史上に与えられて然るべきであろう。然し「オセアニア」も亦これに劣らぬ位置を主張して不当ではない。フロベニウスの“Die Kulturformen Ozeaniens,” *Penn. Mitt.* 1900. からグレーブナーの“Kulturkreise und Kulturschichten in Ozeanien,” *Zeitschr. f. Ethnol.* 1905. へと続く研究によつてである。

だが、問題はアフリカ或はオセアニアそれ自体にあるのではない。我々がここで注目せねばならないのは、アフリカにせよオセアニアにせよ、ともにその文化圏的研究の先鞭がフロベニウスによつてつけられたという事実である。前記アンカーマンとグレーブナーの協同研究は、それが革命的偉業と讃えられるの余り、これを嚮導したフロベニウスの業績を不当に掩いかくす結果となつてしまつた。フロベニウス自身が二人の前に自らの業績を卑下したのであるから、⑤ それが無理からぬことであつたかも知れない。然しながらそれ

にもかかわらずフロベニウスが直接の手びきであつたことは、アフリカもオセアニアも変りはない。これは後継者グレーブナー自らの語る処である。^⑧とすれば、フロベニウスの不当な没却は、およそ先駆者につきまといがちな不遇とは言え、それなりに済ましきれぬものがある。文化圈説の初期形成過程を顧みる以上、先ず以てフロベニウスの業績が採り上げられねばなるまい。

もともと、フロベニウスのアフリカ及びオセアニアの研究は別個になされたものではない。彼は博物館資料の比較研究を通じて、西アフリカとメラネシアとの間に、単なる二、三の文化要素のみならず、全体としての文化が相関連をもつものであることを論証しようとしたのであり、^④これを受けてアンカーマンとグレイブナーの前記協同研究が、それぞれアフリカ・オセアニアを分担してなされたのであつた。されば、この両地域を切り離して文化圈説の形成過程をたどることは妥当ではないが、本稿ではとりあえずオセアニアに限つて顧みることとしたい。

前掲“Die Kulturformen Oceaniers”^⑨においてフロベニウスの採つた方法は、その師ラツツェルによつて既に案出された地理的方法と形態規準(Fornkriterium)とを引継いだものであつた。所謂地理的方法が、民族学者にして同時に地理学者であるラツツェルの創案

にかかるとは意味深い。その地理的方法とは、考察の対象となる文化要素の分布を、具体的に地図上に記入して、その伝播の経路を推定するものである。^⑩観念的な、文化の独立發生論(或は併行發展論)のなお優勢であつた当時にあつて、かような具体的方法を案出したことは正に画期的な出来ごとと言わねばなるまい。フロベニウスはこれをそのまま採用し、アフリカの研究にあつてもさうであつたが、^⑪ここでも十八葉の精密な分布図を作製し、これを考察の基礎としている。そればかりではない。オセアニアの諸島嶼の地理的配列それ自体が、彼の考察の主要な裏づけとなつていたのである。即ち、フロベニウスによれば、オセアニアにはインドネシアから東南に向つて三つの通路が走つている。それはオーストラリアへの南方軸、メラネシアへの中央軸及びマイクロネシアへ伸びる北方軸の三者である。そして大陸・諸島嶼の配置からするかような通路の想定は、後述するごとくオセアニアの文化の分布を理解する上での、重要な前提とされている。

ラツツェルは比較の材料として、僅かに弓矢を挙げたのみであつたが、フロベニウスは比較すべき文化要素として、アフリカの場合には十三種目、^⑫ここでは九種目を採り上げている。二地域間で類似する文化要素の数が増せば増す程、両地域の関連は確実視されると

云う、所謂量的規準 (Quantitätskriterium) の創案が、フロベニウスによると言われるゆえんである。その種目は、石斧・太鼓・衣料・建築・舟・飛道具・盾・教詞・発火具の九種であるが、一説明かなようにその選択は蕪雜であり、何の根拠ももない。彼の研究が博物種資料に主として依存した結果の、やむを得ぬ限界であつたにせよ、何等文化の内的関連の考慮も無しに、随意に採り上げた若干の要素を集合して Kulturkomplex と呼ぶならば、これはミュルマン (W. E. Mühlmann) の所謂要素主義 (Elementarismus) とのしりを免れ得ないであろう。が、それはあくとして、結論的に言えは、この九種目の文化要素のそれぞれに就き、地理的分布とそこに見られる形態の異同が精細に比較される。例えば盾について言えば、その盾面の形・長さ・巾・厚さ、把手の構造・位置、材料、附属品等一つの盾を構成する各部分が個々に検討されるのであつて、その際ラツツェル伝来の形態基準が用いられるのである。そしてかような分析と比較の結果、各文化要素について、その分布が決して相互に何の脈絡も無く各個独立にあるのではなく、数個の特定な系統をひいて組織的に分布するものであることが結論されるわけである。形態的なもののみが比較の唯一の対象とされていることは、形態の過大評価との非難を屢々蒙るゆえんであるが、これも又ミュルマン

によればラツツェル以来尾を引くものだと言われる。^⑩ 良きにつけ悪しきにつけ、フロベニウスの業績は、ラツツェルの継承の上に、これをより發展させて現れたものであつた。

処で、右に結論的に述べたフロベニウスの方法は、厳密には未だ客観的な方法と称し得ぬ体のものであつた。なぜならば、彼はこれを明確な理論的根拠に支えられて使用すると言うよりも、むしろ直観的な形で、悪くすれば「独り合点」の態度で扱っているからである。その結果は導き出した結論の上にも、後にグレーブナーに依て大きく修正されねばならぬ程の、多くの誤謬を残すこととなつた。

その態度とは具体的にどのような点を指すのか。彼の論述の全容をここに紹介することは、到底紙幅が許さない。ここでは抽象的とはなるが、彼の論述の展開のさせ方を概括して、その間における彼の態度を指摘するに止める。

フロベニウスは先ず、既述のごとくオセアニアの大陸・諸島嶼の地理的排列を、インドネシアをかなめとする三本の軸として理解し、しかる後、先に蝕れた石斧以下九種目の文化要素の形態を、順次分析してゆく。各文化要素について、その広範多様な形態分布の内に、形態の本質的な類似と相異及びそれぞれの分布範囲を発見することが、その目的である。然しこの場合、フロベニウスは、あらかじめ、

その結末の予測を持つていた。彼は謙虚に事実を発見してゆくと言うよりも、寧ろ牽強とさえ見える仕方では、すべての文化要素の形態を、三つの文化系統（文化複合—文化圏）へ類別してしまおうのである。そしてこの三つの文化系統とは、分布の上では先に挙げたオセアニアの地理的三軸に、それぞれ対応するものである。

然しながら、如何に牽強とは言え、すべての形態を截然と三区分することは不可能であつた。何故なら、仮令この三系統の存在が事実であるとしても、現に此の三者がオセアニアに並存する限りにおいては、相互の接觸混合は殆ど避け得ぬ処だからである。さすがにフロベニウスもこの事実を無視することはない。否、却つて彼は此の事実を以て、その三系統の文化に時間的な先後關係のあることの証にしようとするのである。つまり文化の混合現象を、同時に併存する幾つかの文化系統の混合とのみ解さずに、時間を異にして現れた幾つかの文化系統が累積した場合にも生ずると考えたのである。そして、オセアニアにおける前記三系統の文化を、何処からか互に時期を異にしてオセアニアに流入し來つたものとして、動的且つ立体的に歴史的に理解しようとしたのである。それはどのように実証されるのであろうか。

然しこの場合にも彼には実証に先立つて予断がある。それは第一

に、オセアニア文化の三系統が、いずれも地理的三軸のかなめに當るインドネシアに源を發したとすること、第二には、この三系統の文化について南方軸をネグリート的、中央軸を前マライ的、北方軸をマラヨアジア的とそれぞれ特長づけ、且つ此の順に時間的先後關係をもつものとするのである。然しながらこの予測は、決してオセアニア研究に臨んで差し当り生じたものではない。フロベニウスは既にこのオセアニア研究に先立つ西アフリカ文化圏の研究において、オセアニア及びアフリカを支配する文化はすべてインドネシアを故郷とすると言うこと、そしてそのインドネシアに發した文化は大別して古いネグリート文化と、より若いマライ文化とされ、この後者は更に古マライ文化（マラヨネグリート文化）と、より若いポリネシア・ミクロネシア文化とに分れると言う假説を立てているからである。^⑩ 当面問題としているフロベニウスのオセアニア研究も、実はこの假説に基いて、西アフリカ文化圏の研究に続くものに他ならない。

然しながら右の假説は、フロベニウスにとつて單なる作業假説と言わんよりは、むしろ直観的な信念に近いものであつた。されば、その西アフリカ文化圏の研究におけると同じく、オセアニア研究にあつても、フロベニウスにはこの假説を事実に沿つてつきつめて検

証すると言ふ態度は認め難い。そこに現れるのはむしろ、仮説に浴うように事実を組立てると言う、いわば牽強の態度である。先に述べたごとき、オセアニアの文化を三系統に分別する際の態度は、正にこれであつた。

然らば次にこの三系統を時間的に順序づける場合には、どのような実証がなされているであろうか。これについては特に積極的には——牽強にせよ——なされていない。フロベニウスにとつては、余りに自明なことであつたからであらうか。だが、その間自らこれに触れぬ処がないわけでもない。それらを總括すれば、およそ次のような解釈によるようである。即ち、ネグリート文化はオセアニアに最も広く散在するが、純粹且つ集中的に存在するのはオーストラリア西部のみである。他の地域では何れも他の文化と混合し、しかもその勢いは弱い。この現象は、オーストラリア西部についていえば、ネグリート文化が他の混入物をまじえぬ最も純粹な、従つて又最も古い文化であることを意味するものであり、他の地域について言えば、ネグリート文化がその故郷（インドネシア）から、他のより若い文化に伴われて共に伝播したことを現し、その為にはこれらの若い文化以前に既にそれが故郷に存在していたことを意味する。次に前マライ文化は主としてメラネシアに分布するが、この文化の一部

の要素は、ミクロネシア、ポリネシアに主として分布するマラヨアジア文化の中にも発見される。これはやはりマラヨアジア文化が、その故郷に既にあつたものを相伴つて伝播したことを現し、従つて前マライ文化がマラヨアジア文化に先立つことを意味する。マラヨアジア文化が最も若い文化であることは、それが故郷インドネシアにおいてもなお最も優勢な文化であることからも判るが、抑々このインドネシアがすべての故郷であるということは、ここに三文化のすべての分布が重複すること、そして現に最も若々しい文化が發展しつつあることからして明かである。

以上、フロベニウスがオセアニアで試みた、文化圏的研究の手續と結論とを要約したわけであるが、そこに我々がフロベニウスの主要な態度として認め得たことは次の諸点であつた。(一) ラツツェルから継承した、形態基準に基く文化の形態的研究法と、地理的方法の全面的な活用。(二) 量的基準の創案と、複合としての文化の取扱ひ。(三) 従つて文化の所謂要素主義的取扱ひ。(四) 文化系統（文化複合—文化圏）の動的・立体的—歴史的取扱ひ。(五) 仮説に基くむしろ牽強な演積的態度。

これらの中(四)を除いて他はすべて、良きにせよ悪きにせよ、次に

述へるグレーブナーに継承され、文化圈説の方法的基礎を確立したと言われ、彼の“Methode der Ethnologie” 1911 にも基本的性質が現れている。フロムニウスの記述には理論構成が欠け、逆に④のごとき掩い難い仮説が横行していることは事実であり、又先にも触れたごとくその業績の価値は、アンカーマンとグレーブナーとの光彩の蔭に不当に掩いかくれ勝ちであるが、右の認識からするならば、我々はフロムニウスにおいて文化圈説の方法的基礎が定まつたとは認めぬまでも、彼の業績を顧みずしてグレーブナーのみ称揚するのでは不都合、強へ主張せねばなるまい。

- ① W. Schmidt: Handbuch der Methode der Kulturhistorischen Ethnologie, 1927, S. 25~29.
- ② Zeitschr. f. Ethnol. 1905, S. 88 Diskussion 尚シニエマンに依れば、フロムニウスは自らの真の欠陥のみならず、功績をおもむき認してしまつたと言ふ (Schmidt; ibid. S. 28)。
- ③ F. Graebner: Ethnologie, S. 445 (Die Kultur der Gegenwart, III, 1923)。
- ④ W. Schmidt: ibid. S. 26~27.
- ⑤ Patern. geogr. Mitt. 1900, S. 204~215, 234~238, 262~271.
- ⑥ 然し地理的方法是グレーブナーによれば「……方法の一部ではなくして技術的な補助手段をすぎなす。」(Methode der Ethnologie, 1911, S. 133.)

文化圈説の初期 (石川)

- ⑦ I. Frobenius: Der Westafrikanische Kulturkreis (Patern. Mitt. 1897, 1898) の序は二十葉の分布図が附せられてゐる。
- ⑧ I. Frobenius: ibid. 1897, S. 225~236, 262~267, 1898, S. 193~204, 265~271. ここに採り上げられた十三種目とは、盾・衣服・弓・住居・仮面・人形・喫煙具・文身・装身具・絃楽器・太鼓・マリンバ・小刀。
- ⑨ W. Schmidt: ibid. S. 27.
- ⑩ W. E. Mühlmann: Geschichte der Anthropologie, 1948, S. 145~147.
- ⑪ W. E. Mühlmann: ibid. S. 145.
- ⑫ I. Frobenius: ibid. 1898, S. 265~271.

III. グレーブナー

前述したごとく、既にフロムニウスにおいて文化圈説の基本的態度はほぼ定まつたにせよ、この態度に裏つけられた方法を慎重に考慮し、やむにこれを理論づけざるを得ざるの働きの終にフロムニウスには求め得べくもなかつた。彼は理論家ではなかつた。⑦の言うべき彼の粗けずりな方法に、理論の磨きをかけて終にこれを大成した功績は、やはりグレーブナーに認めねばならない。然しそれが“Methode der Ethnologie” 1911. の形を以て結晶するまでに、猶十年余の歳月を要した。先にフロムニウスに認めた文化圈説の基

本的態度は、ここでグレーブナーにより始めて明確な形をとつて方法として打出されたのである。

然しながら、かようなグレーブナーの方法論も決して当初から確立されていたものではあるまい。これに先立つ幾つかの実証的な地域研究——と言つてもそれは野外研究の意ではない、歴々非難されるように、彼の研究は主として博物館資料に基いていた——のプロセスにおいて、徐々に結晶を見たものと考えられる。その端緒をなす研究が、一九〇四年の「ベルリン人類学・民族学・先史学会」に、アインカーマンのアフリカ研究と相呼応してなされた講演「Kulturkreise und Kulturschichten in Ozeanien」である。③ 初期のグレーブナーにとつて、オセアニアは文化圈説を確立する為の実験室的役割を果し、彼はこの講演以後にもオセアニアに関する幾つかの研究を發表しているが、その間部分的な修正はあるにも拘らず、方法とこれに導かれて再構成されたオセアニア文化史の基本的大綱には變りがない。これは、既に「方法論」も形を整えて刊行され、その後なお十余年を経て書かれた彼の体系的な著述「Ethnologie」1923^④を見ても明かに看取される処である。とすれば、このことは逆に、彼の文化圈的研究にはその当初から、既にかなり完成した形でその方法が打出されていたと言ふことにならう。

グレーブナーは理論家である。彼はフロベニウスの方法を踏襲しながらも、これを納得出来る形で利用する為には、フロベニウスに見られた少なからぬ直観や矛盾やあいまいさを排除しなければならなかつた。前記「Kulturkreise und Kulturschichten in Ozeanien」は既にかような態度を以て貫かれているのである。

それは具体的にはどのようなのであろうか。然しこの研究の概要については、先に紹介を試みたので、ここには累説をさける。唯々その際に充分触れ得なかつた、グレーブナーの立場と方法とを、フロベニウスとの関連の上で顧みてみたい。

(一) 地理的方法・形態規準・量的規準はフロベニウスからそのまま継承され、例えば分布図のごときも六葉作製され、又採り上げられた文化要素も多数に上る。但し、要素主義的欠陥は依然として免れていないし、又要素選択の原理も欠けている。然しこれはグレーブナーによれば資料の正確を期する為のやむを得ぬ措置であつて、その代りこれに基いて導かれる確実な結論は、將來新資料によつて多少の修正は加えられるにしても、根本的には覆されることがあるまい、と満々たる自信によつて支えられている。⑤ 唯々フロベニウスと異なる点は、採り上げた文化要素が必しも物質文化に限られず、社会組織や風習のごときをも含んでいることと、採り上げた文化要素

が必ずしもすべての文化圏に照応するとは限らないと言ふ点である。これは資料的な条件にもよるが、それよりもむしろ、次に挙げるグレーブナーとフロベニウスとの研究手続きの相違に由来したものと考えられる。

(二) フロベニウスは先ず個々の文化要素ごとにその形態と分布の分析から着手した。そして各文化要素ごとにこれをネグリートの・前マライ的・マラヨアジア的の三系統に形態分類しようとつとめた。グレーブナーはかようなフロベニウスの、いわばアブリアリな三形態への、各文化要素のふり分けを、次のような言葉で非難している。「その(フロベニウスの)研究は殆ど全く証明を誤り、甚だしい図式性に陥っている。その結果、文化的に異質なものを混同し、^⑩反対に同種のものも僅かばかりの差異の故に分離している。」^⑩それではグレーブナーは問題解明の糸口を、何処に見出そうと言うのであろうか。

「問題は一つの確固たる点、即ち様式と分布とに従つて多元的起源の可能性を全く許さぬ或文化現象を見出すことである。」^⑩そしてかような現象が他のものと結合して、且つ他種の現象とは截然と區別されて、処々に分布することが認められるならば、その範囲に互つて此の文化複合が存在する、或は嘗て存在したことが充分推測さ

れる、とグレーブナーは先ず考えるのである。従つて彼にあつてはフロベニウスと異なり、あらかじめ三形態(或は三系統)を予断しておいて、その上で各文化要素を片はしからこの三者へ分類してゆくと言ふ、仮説演进的な態度は採られず、右に述べた条件に沿う文化要素及び複合を発見することから始められるのである。そしてその際、物質文化のように比較的随意的な伝播が可能なものではなく、且つ全体的文化生活との関連が深いと考えられる「社会組織」のごときが、発見の手掛りとして有力な文化要素である、と見做される。それ故彼は東メラネシアに分布する「独特」な社会制度、即ち母系外婚双分割の分布の確認と、これに随伴して出現する文化要素の種目及形態の確認——所謂東バブア文化複合——文化圏の発見を以て、その研究を開始したのである。

(三) 同様の手続きによつてグレーブナーは、此の東バブア文化圏の他に、オセアニアに、二つのネグリートの文化圏・西バブア文化圏・メラネシア文化圏・ポリネシア文化圏(プロトポリネシア・ポリネシア・ミクロネシア)の存在を確定するのであるが、これらの文化圏は決して常に互に排他的にそれぞれの地域を占有すると言ふわけではなく、むしろ多くの場合重複して現れるのである。それにも拘らず、之をそれぞれの文化圏として區別し得た根拠は、重複の

中に自からずれがあるからに他ならない。そしてこのずれによつて、特定の文化複合の特に集中的に現れる部分こそが、先に述べたことき分析の手掛りとされたのである。然しともかくも、重複している部分を、重複の事実そのものに則つて「重複圏」或は「混合文化圏」などとせず、各文化圏にそれぞれ含ましめたのは如何なる理由からであらうか。それはグレイブナーにおいて、空間的な文化圏が直ちに時間的な文化層として把握されたからに他ならない。尤もかような思考方式は既にフレベニウスにも認め得ぬわけではない。否、幾つかの文化系統（複合）が時間を異にして相継起すると言う思考そのものは、フロベニウスからグレイブナーが継承したものに他ならない。唯々フロベニウスにあつては、文化の「被覆」とか「層位」とか言う觀念が強調されるよりも、むしろ継起して現れて来るその「通路」の問題が、常に意識の前面に押出されていたのであつた。「層位」の觀念を明瞭ならしめたグレイブナーの功績は、やはり認めねばならない。

(四) 文化圏を直ちに文化層として理解するならば、グレイブナーが先に指摘した東ババア文化圏その他の文化圏は、何を根拠として層位化されるのであらうか。フロベニウスが彼の見出した三つの文化系統に新旧を区別した際には、先に述べたごとく客観的な基準も

特になく、予断に合せて事実を解釈すると言う態度であつた。その結果は、例えばポリネシアに発見されるネグリト文化や前マライ文化の断片は、マラヨアジア文化がインドネシアからポリネシアへ伝播するに際して、あらゆる文化の故郷インドネシアより相共に伴い來つたものとして、マラヨアジア文化の形成・伝播以前に、既にネグリト文化や前マライ文化がインドネシアに存在したことを意味するものとして扱われた。然しながらグレイブナーは、かような予断に基く御都合主義的解釈を厳しく拒絶する。文化圏の層位關係を決定する客観的基準を求めてここに彼が得たものは、文化圏の分布の事実そのものが語る処を率直に聞くと言ふことであつた。それは例えば次のようにである。

主としてオーストラリアからメラネシアに分布する、東ババア文化と西ババア文化の先後（層位）關係を決定する場合、純粋な西ババア文化がオーストラリア大陸で東ババア文化に仕切られて、その北部及び南部に分布すること、此の事実によつて、オーストラリアにおいて西ババア文化がより古い文化として存在し、それが新來の拡張的な東ババア文化によつて僻遠の地へ圧迫されたものであることが判る。しかもその際、東ババア文化が東のメラネシアでのみ支配的且つ殆ど純粹であることからして、この文化のオーストラリア

への拡張が東から進められたことも判る。

又或は、オセアニアの最古文化層と見做されるネグリート文化にしても、これがオセアニア全般に散發的に分布し、然し本質的にはオセアニア最僻地の一つである、オーストラリア最西部及び南東山脈地帯に限られていることから、嘗てオセアニアに最も早く、且つ広範にネグリート文化が拡がっていたことが判断され得る。

かような事例に示されたとき判断で、グレーブナーは文化圏すべての層位化を試みるのである。そこに認められる、フロベニウスとの最大の径庭は、フロベニウスが常に「通路」を最も強く意識し、従つて文化層を累積の行われる面積的なものとして把握することが比較的少なかつた^⑩——例えば、既に幾度か述べたように、ポリネシアに散發するネグリート文化の断片は、右に述べたグレーブナーのネグリート文化層の解釈とは異なり、故郷インドネシアからその後の若い文化即ちマラヨアジア文化に伴われて運ばれた、と解釈される——のに対して、グレーブナーが、文化層を幾重にも累積の行われる面積的なもの、従つてその同時的断面としての文化圏には、出現の時期を本来異なる幾多の文化が、複雑に混在して認められるとし、その分布状態の分析の中から——何の予断に把らわれないことなしに——卒直に層位関係を発見しようとしていることである。

文化圏説の初期（石川）

この点は特に重要である。何故ならば、文化圏説にとつては、文化圏を発見することは準備作業にすぎず、これを層位化することこそが目的だからである。^⑪そしてこの目的に沿う層位化の方法は、当面問題としているグレーブナーの研究に七年遅れる、その *Monothote der Ethnologie* 1911 において、始めて明確な説明を得たのであつた。

「或文化的統一を示す地域が、他の文化複合によつて切斷されている場合、後者は少くともこの地域ではより若い。同様に、或文化複合が他の複合によつて被覆された場合、即ち或る文化の支配的な地域内に、他の、文化の要素の端々がのぞき現れていることによつて、この後者の文化の嘗ての存在が暗示される場合、被覆している文化の方がより若い。」その領域の一部において他の文化を被覆しているような文化は、その混合範囲外から混合地域の方へ分布して来たものである。「混合の強度が不等である場合には、活動的な文化複合の進路は、量的・形態的強度のより大なる方から小なる方へ向うものである。」或文化複合の分布が他の文化領域内へ楔入し、しかもその楔の輪が一方は閉じ一方に開いているならば、この楔は開いた方から進んで来たものである。^⑫

かような説明がそれである。然しながらこのような説明に該当す

る事實は既に、グレーブナーの最初の文化圏的研究において適用を見ていたことは、先に挙げた事例からも明かであろう。文化圏説の基本的方法は、一九〇四年グレーブナーがその最初の文化圏の研究を発表した時において、既に定まつていたと見ねばなるまい。それは一つの習作ではあつたにせよ、同時に文化史的民族学の綱領宣言でもあつたと評されてよからう。

(4) フロベニウスの拠つて立つた仮説は、グレーブナーには踏襲されない。踏襲されないと云うよりも、仮説に合せて事實を組立てようとする態度は、厳しく拒絶されたのであつた。然しそれにも拘らず、我々はなおグレーブナーにおいても一つの仮説の潜むことを認めないわけにはゆかない。その仮説は、一九一一年の“*Methoden der Ethnologie*”では、はつきりと語られている。

「……自然民族の歴史にとつて重要なアフリカ・オセアニア・アメリカの陸塊は、甚だ狭隘な基底面でのみアジアに結ばれていたもので、少くとも陸上を伝播する文化にとつては、侵入の可能性は著しく制限されていた。この故に、交互に接続した文化複合には、必然的に一種の層化現象が生じた。即ち、最も若い文化は先ず入口に席を占め、最も古い文化はこれらの大陸の最も僻遠な地へ押込まれた、と考えられるのである。但し、文化拡散がすべて、大陸内部でも同

様に具合よく現れるとは限らない。大きな肥沃な谷や平野は、文化の拡散を容易ならしめるし、山脈・砂漠・沼沢などはこれを困難にする。かくて古い文化残滓は、特に大きな流域の最外分枝・人里離れた山岳地方・通過困難な原始林地帯・経済価値乏しい地方等々に保存されるのである。かような現象を被覆や分裂の現象と結び合せて観察することは、これに附加さるべき海上移動による放射的伝播の可能性の増加にも拘らず、文化の層序にとつての良き基準となる。」⁽¹⁾

ここに我々は、ラツツェル以来の、文化伝播における地理的考察の継承を認め得ると共に、アフリカ・オセアニア・アメリカの原始文化が、いずれもアジアから伝播したとする仮定の先立っていることも認めぬわけにはゆかない。この点については、グレーブナーを継承したシュミット(W. Schmidt)において、一層明確に表明されている。

「文化史派の作る唯一の仮説——といつても人類学や先史学の如き他の科学も、これを実証的に反駁するわけにはいかなないのであるが——、それは人類發生の単一的起源、恐らくはアジアに始まりそこから爾余の各大陸に漸次移動せるものとなす仮説である。」⁽²⁾

この仮説に基き、最古の文化がアジアから見て最僻遠の地に留ま

るとする見解は、然しながら既にグレーブナーの始めのオセアニア研究に採られていた。先に挙げた事例——ネグリート文化をオセアニア最古文化圏と見做す根拠として、これが本質的にはオセアニア最僻地の一つである、オーストラリア最西部及び南東山脈地帯に限られていることが挙げられる——は、これを表している。この点でも、グレーブナーのこのオセアニア研究は、文化圏説の基礎を置いていると言わねばなるまい。が然し、これももとを正せば、フロムニウスの仮説の修正に他ならない。フロムニウスが、伝播した文化の性格までも——ネグリート文化と新旧両マライ文化とに分けて——仮定した点は、さすがにグレーブナーには継承されぬというより拒絶されているが、然しアジアを伝播の源と看做したこと、そして伝播の経路を地理的に考慮したこと二点だけは、フロムニウスに本質的には異ならないのである。

- ① W. E. Mühlmann: *Geschichte der Anthropologie*, 1948, S. 146.
 ② W. E. Mühlmann: *ibid.*, S. 147. 或はマリノフスキーは言う。「伝播論は、主としてグレーブナーやアンカーマンのごとき博物館のめぐらもとの影響によつて、古い建物のガラス棚や穴窓に一まともにされていた整理の悪いもののインスピレーションを結ぶつけられてきた。」(B. Malinowski: *A Scientific Theory of Culture and Other Essays*, 1944, p. 20~21)

- ③ これは *Zeitschr. f. Ethnol.* 1905, S. 28~58 に再録されている。例えは“Die melanesische Bogenkultur und ihre Verwandten,” *Anthropos*, 1909, “Australische Speerschleuder,” *Petern. Mitt.* 1912, など。
 ④ Die Kultur der Gegenwart III Teil, V Abteilung, *Anthropologie*, 1923, S. 435~587.
 ⑤ 拙稿「文化圏序説——文化史的民族学の弁明と批判を通じて」(人文地理 第十一号 一九五一年)
 ⑥ F. Graebner: *Kulturkreise und Kulturschichten in Ozeanien*, *Zeitschr. f. Ethnol.* 1905, S. 29.
 ⑦ 尤も、フロムニウスが常に考察の対象を物質文化に限ったというわけではなく。ラツツェルを拡張して、之を精神文化、(例えば神話)にまで押広げたのは却てフロムニウスであつた。(F. Graebner: *Methode der Ethnologie*, 1911, S. 98)
 ⑧ F. Graebner: *Kulturkreise und Kulturschichten in Ozeanien*, *Zeitschr. f. Ethnol.* 1905, S. 29.
 ⑨ F. Graebner: *ibid.*, S. 30.
 ⑩ 文化圏を累積の行はれる面積的なものとして把握することが、フロムニウスに全く欠けていたわけではない。特に西アフリカ文化圏の研究では、オセアニアの場合と異なり、この態度が明瞭である。(Petern. Mitt. 1898, S. 203)
 ⑪ F. Graebner: *Methode der Ethnologie* 1911, S. 140. 拙稿「フリッツ・グレーブナーその方法論覚書」(人文地理 第

九号 一九五一年）八二頁。

⑬ F. Graebner: *ibid.*, S. 110-112 拙稿、前掲八二、三頁。

⑭ F. Graebner: *ibid.*, S. 141-142.

⑮ W. Schmidt: *Werten und Wirken der Völkerkunde*, 1924.

大野俊一訳「民族学の歴史と方法」（一九四四年）一五二頁。

四、一応の結び

以上、文化圈説の草創期とも言うべき、フロベニウスからグレーブナーへの継承の時期を扼え、この学説の形成過程を顧みようとしたものである。そこに見出し得たことは、文化圈説の方法の基本が、既にフロベニウスにおいて、方法以前であるにせよ、一つの「態度」として現れていたこと、それがグレーブナーに継承されるが早くも方法として明確化され、それはやがて文化圈説が一応の理論構成を完成した折にも、その骨子として貰かれていたと言ふことである。換言すれば、グレーブナーの“*Methode der Ethnologie*” 1911年既に“*Kulturkreise und Kulturschichten in Ozeanien*” 1904年において骨子を得ていたと言ふこと、そしてこのグレーブナーの業績は、フロベニウスを顧みずしては正当に評価をれ得ないと言ふことである。

以上の分析がなお徹底なものであることは、筆者自らこれを認

めねばならない。フロベニウス、グレーブナー両者についてのみならず、それは就中ラッツェルをここに殆ど扱い得なかつた点について指摘されるであろう。伝播論の創始者、そして又地理的方法と形態基準の創案者としてのラッツェルを無視しては、文化圈説の初期は論じ得ないはずである。更に、本稿ではフロベニウスの創始として扱つた量的基準も、グレーブナーに依れば、^⑯実は既にラッツェルに暗示されていたと言ふ。ラッツェルは是非顧みられねばならない。その意味でも、本稿は一つの覚書の域に止まるものである。

⑰ シュミットやミュールマンの見解にここでは一応従つた。彼等はいずれも、量的規準の創案をフロベニウスに歸している

(W. E. Mühlmann: *Geschichte der Anthropologie*, 1948, S.

146. W. Schmidt: *Handbuch der Methode der Kulturhistorischen Ethnologie*, 1937, S. 27)

⑱ F. Graebner: *Methode der Ethnologie*, 1961, S. 99.